

A decorative border of pink cherry blossom snowflakes surrounds the central text area. The snowflakes are stylized with multiple petals and are scattered around the perimeter of the page.

R18

桜散って、また咲いて

猪熊夜離

何かが首筋に押し当てられていた。濡れて、生温かくて、弾力がある。それが首筋の太い筋肉に沿って下から上に何度も這い回る。僅かに表面がザラついていた。くすぐったいような、痛痒いような微妙な感覚。だがそれ以上に心地よい痺れが全身を満たしていく。魂まで溶けてしまいそうな快感だった。

「んっ……」

喉の奥から声が漏れた。

甘えるように鼻にかかる、媚びるような吐息。それに応えるかのように、今度は耳の裏あたりに湿った柔らかさを感じた。熱い唾液とともに吸いつかれれば背筋に震えが走った。その拍子に瞼が開く。

視界いっぱい広がる、暗闇に包まれた世界。窓の外では未だ雨音が響き渡っていた。

ずしりと他人の重みを感じた。誰かが自分の身体の上に覆い被さっている。彼の吐息を感じる。少しだけ荒い。興奮している。わたしで興奮しているんだ。

「あっ……ああ、ふう……う、ああ」

「桜」

耳元で彼に囁かれた。こんなことをしてはいけない相手。受け入れてはいけない男の人。姉の夫。衛宮士郎の声がする。

久し振りに再会した彼の声は記憶より少しだけ低い。

自分たちの間に流れた十年という歳月を思わせた。

「桜」

また彼が呼んだ。

「先輩」

今度は桜からも呼び返す。

すると女の首筋に顔を埋め、耳元で囁いていた彼が上体を起こした。身体に申し掛かっていた重みから解放される。だがその代りに別の熱さが胸に触れた。乳房を掌で包み込むように持ち上げられる。指先が乳首を探り当てると、それを優しく摘まみ上げた。

「あんっ！」

桜は思わず声を上げた。

「やだっ！ 先輩ダメです！ そんなとこ触ったら……あっ！」

胸の先端からビリビリとした甘い痛みが広がる。それが身体全体に伝播していく。彼は桜の反応を見て嬉しげに微笑むとさらに彼女の胸に口づけてきた。

「はあんっ、先輩そこ吸わないでください……ああう！」

口先だけの拒絶は容易くねじ伏せられた。固く勃起した桜色の蕾は男の唇に挟まれるだけで激しく疼いた。舌先で弄ばれるほどに切なさが増す。乳首を強く嘯まれると意識が飛びそうになった。

聞きたいことはいくつもあった。

どうして、わたしたちは裸で同じ布団に入ってるんですか？

どうして、わたしたちはセックスしてるんですか？

どうして、先輩は姉さんを裏切るんですか？

だけど彼に触れられると頭の芯がぼんやりとしてきて何も考えられなくなる。

彼の胸を押し返そうとする腕に力が入らない。十代のころ好きだった相手、青春の残滓、当時は叶えられなかった想い。少女時代の心残りに決着がつけられるかと思うと抵抗する気力が根こそぎ奪われていく。

だからこそ引き返すなら今しかない。本当に手遅れになる前に。

「せんば——ッ、だめ、です……先輩には姉さんが、先輩は姉さんと結婚してるじゃないですか。それにわたし……ふうっ、婚約者がいる……んッ、です。もうすぐ結婚するんですよ」

それは士郎も知ってるはずだ。姉の凛やセイバー、留学先のイギリスで知り合ったルヴィアという女性を伴い、久しぶりに帰国した彼の目的は桜の結婚を祝うためだったのだから。

なのに今夜、士郎は妻の妹である桜を抱こうとしている。これじゃあ浮気以外の何物でもない。

「やめて……ください。お願いします、もう終わりにしましょう。明日になったら全部忘れます。今まで通りにできますから、これ以上わたしに構わないで下さい……」

「その凛が望んでるんだ。俺に桜を抱いてやってってくれて」

「え……？」

言われたことが理解できなかった。

「姉さんがそんなこと——ひいう!？」

また乳首に噛みつかれた。鋭い痛みとともに再び電流のようなものが流れる。痛みはすぐに和らいで、あとに残ったのは尾を引く快感だけ。噛まれた乳首を優しく舐められると、どうしようもなく身体が反応してしまう。彼のくれるアメとムチに桜の身体は馴けられる。

「ふあ、あ、せ、んばい……」

「いい加減に諦めろよ桜。桜だって本当は分かってるんだろう？ 自分の身体のことくらい」

「んっ、くあ、あああああっ！」

両方の突起を同時に摘まれ、桜は喉の奥から悲鳴を上げた。痛みの中に混じっているのはまぎれもない快感。桜の意思に反して、肉体が快楽を受け入れようとしている。

「認めろ桜。おまえが悦んでることなんて、誰の目にも明らかだ。ここで俺に抱かれたがってるんだろ」

否定しきれない。

「そんな……わたしは……」

桜は言葉を濁した。胸の奥がざわめいている。ずっと求めていた男にこうして愛撫されている。単純な事実を心の底では喜んでしまっている。そんな自分が嫌だった。

「あ～もう、焦れたいわね」

はっきりした返事ができないでいると障子が勢いよく開けられた。スパーンと小気味良い音を背に黒髪の美女が力強い足取りで部屋に入ってくる。ズンズンと効果音

が聞こえてきそうな歩幅で布団のすぐ横まで辿り着いた美女は、一転して音もなく優雅に正座した。

自分の夫と妹がセックスしてる真っ最中のそばに。

「ち、違うんです、姉さん。これは——」

乱入者に桜は弁解する。自分の姉、衛宮凜……旧性、遠坂凜に。

「いいのよ桜。お姉ちゃん全部知ってるんだから。だって士郎に桜とセックスしてくれって頼んだのは私なんだから」

「え、うそ……どうしてそんな……あっ！」

士郎が再び乳首に強く吸いつく。会話に意識を持っていられ油断していた。桜は腰が浮くほどの衝撃を受けた。

「わあすごい。感度抜群ね。ふふ、可愛い」

「知らない。こんなこと初めてなんです。わたし、こんなに感じたことは……あっ」

桜が困惑している間に士郎の手が下半身へ伸びてくる。内股をなぞられて肌が粟立つ。その指先は更に上へ。濡れて膨らんだ大陰唇を優しく刺激される。

「ひゃう！　そこ、ダメ！　んあっ」

「そりや本当に好きな男の人に抱かれるのと、本命を諦めるために結婚するだけの相手とのセックスじゃ気持ちの乗り方が違うってもんよ」

愉しげに笑う凜。その視線の先で士郎に撫でられた桜の秘裂がさらに潤った。

「いや、いやああ」

指の腹で割れ目を上下に擦られる。桜はかぶりを振りながら切なげに身を振らせた。

「ああ、いや、見ないでください。こんなところ、恥ずかしいです」

口にした言葉とは裏腹に身体はどんどん高ぶっていく。膣口からはダラダラと粘性の高い蜜が垂れ流され、太股の方まで伝っていた。身体を汚す恥液を士郎や凜に見られていると思うだけで、桜は羞恥でどうにかなりそうだ。

彼が指で触れた部分からジンジンとした快感が生まれて思考を溶かしていく。

「想定よりもクスリの効き方が甘かったみたいね。半端に理性が残ってると話がしづらいわ。一度イカせてあげて」

凜が指示すると士郎は乳首から口を離し、するすると桜の身体を滑り降りる。太ももに両手が添えられたかと思うと優しく開かれる。

「やっ、先輩……そんなところ、開いてはダメです……」
「悪いな桜」

びしょ濡れの花弁を開き士郎が顔を近づけてきた。生温かい舌で割れ目の内側をペロリと舐め上げられる。瞬間、強烈な痺れに襲われた。桜は息もできないほどに悶絶する。身体中を駆け巡る強い疼き。耐え切れず両足をバタつかせて逃れようとするが、太股をガッチリと掴まれているため身動き一つ取れない。

桜が目の奥で飛び散った火花を鎮めている間も、士郎

は淫靡に舌を這わせ続ける。粘膜に直接与えられる容赦のない快感。ひたすら声を我慢することしかできなかった。その我慢とて長くは続かない。

肉豆を吸い上げられ、花蕾を舌で転がされるたび、意識は肉欲の悦びに染め上げられていく。狂ってしまいそうになるほど強い快樂。そのあまりの激しさに桜は泣き叫んで許しを請うことしかできなかった。

わたしに姉を裏切らせないで、断ち切ったはずの未練をあなた自身の手で掘り返さないでと願う裏で、桜は雌媚びの歌を歌い上げてしまう。

「桜、気持ちいいか？」

「そんなこと……んあっ！ ふあっ……！」

（ダメ、このままだと本当におかしくなる。頭が変になってしまう）

「素直になっていいんだ。これは凜も公認なんだから」

「私には結婚の約束をした人がああああああ♡」

「その人と士郎どっちが好きなのよ」

「今は、彼のほうが、好きだから、結婚……する……っ！」

「嘘おっしやい。だったらどうして士郎とのセックスのほうが感じるのよ」

「そ、それは……！」

姉の問いに答えられない。桜自身も戸惑っている。こんなにも身体が反応してしまうことに。

婚約者とのセックスでイッたことはない。淡白と言うのか、いつも彼は通り一遍の愛撫、濡れたら挿入、代わり映えしない体位と律動で射精するだけ。それでも彼は

満足そうだし、桜もセックスだけが結婚ではないからと
思っていた。思っていたのだが。

「まだ士郎のこと忘れられてないんでしょう？ 婚約者
に操を立ててるのがカッコイイと思ってるなら笑わせる
んじゃないわ。好きでもない男の子供を義理で産まされ
て人生台無しになるのがオチよ」

姉の言葉が十年前に蓋したはずの心を抉ってくる。そ
もそも、あなたが先輩をイギリスに連れて行ったせい
じゃないかと桜は言い返せない。そんな向こうっ気があ
れば十年前にもっと戦っていた。

「ち、違います……わたしは彼のことが……好きなんで
す！ 好きって言ってくれました。わたしを幸せにする
って」

「今は桜がその人のこと好きか聞いているの。誰も相手の
話なんかしてないわ」

そんなこと言ったって無関係じゃないではないか。桜
が彼を裏切り士郎のもとに走れば傷つくのは残された婚
約者だ。それに彼との結婚を決めたときから、桜は彼の
期待に応えようと努力してきた。いつか士郎を忘れて、
他の人を愛せるようになるために。

（先輩の隣には姉さんがいるから。私が入り込む余地な
んてないと思っていたから）

それを今さら、ふらっと帰ってきて「好きなら士郎と
セックスしてもいいのよ」なんて。彼を忘れようと努め
た自分の十年が否定された気分になる。

桜はなんでもお見通し顔で振る舞う凛に憤った。

憤ってはいるが、同時に心の奥底ではこう思ってしまう。

(先輩が……あの人の代わりに、ずっと私のそばにいてくれたなら……)

そんな考えが頭をよぎってしまった瞬間、桜の中でタガが緩んだ。

「ふああああっ、ああ、せんばい、もっとお！」

士郎の舌が蜜口の周りを一舐めすると、ひくつく穴に差し込まれる。狭い隘路を押し広げながら、ぬるりとした感触が体内に侵入してくる。

「ひあ、だめ、ああ、そんなところ舐めたらダメですう！」

内側から先輩に舐められてる。先輩の舌が、わたしの恥ずかしいところ、ピチャピチャしてる」

「桜、もう我慢しなくていいんだぞ」

「ふあ……ああ、わたし、こんなに感じちゃってる……ああ、んくっ」

桜は士郎の頭を抱きかかえた。自分から股間を押し付けているような格好だが、そんなことを気にしている余裕などなかった。

(気持ちいい、気持ちいい、気持ちいい……！)

一番敏感な部分を舌で愛撫され、桜の理性はドロドロに溶けていた。抵抗しようという意思すら湧いてこない。むしろもっともっと気持ちよくして欲しいという欲望の方が強かった。

「んんっ……あふっ、ああっ！　そこ、そこ気持ちいいっ……気持ちいいです、先輩……もっと……ふああっ、

ああっ♡♡ きもちいい……もっとして、もっと舐めてっ！」

「だいふ素直になってきたわね。いい声で鳴くじゃない。もっとご褒美をあげなきゃね」

凜は士郎の肩に手を置いて耳元に囁きかける。

「士郎、一度あなたので桜をイカせちゃいなさい。そしたらもっと素直になれるはずよ」

士郎は返事をする代わりに桜の両膝を抱えて持ち上げた。M字開脚の姿勢を取らされる。秘部が丸見えになった。士郎が腰を前に突き出す。

そして————

「ふあああああああああ〜！」

士郎のペニスが一気に膣奥まで侵入してくる。その熱さに桜は悲鳴を上げた。

衝撃で目の前が真っ白になり意識が飛びかけたがギリギリ持ち堪えた。

(すごい……これが先輩の……。熱くて硬くて大きい……あの人とは違う……)

膣壁を通して伝わる熱い脈動が子宮にまで響く。今まで感じたことのない大きさと硬さ、太さに身体が震えた。

「どう桜、士郎のモノは？」

「はい……すごく、大きくて硬いです。こんなの初めて……」

「そう、良かった。気持ちいいでしょう？ 士郎のおちんぼ♡」

「気持ちいい、気持ちいいです……先輩の、おちんちん……あああ♡」

凜に聞かれ、桜は夢中で首を縦に振る。士郎の剛棒で貫かれた膣内は焼けるように熱かった。膣内を蹂躪する肉槍は膣道の隅々までを余すところなく擦り上げ、粘膜を捲っていく。

婚約者に悪いと思う気持ちも吹き飛んで、桜は士郎が繰り出す腰使いに酔い痴れる。

「ふあっ、すご、これ、こんなのダメえ！」

「士郎のは比べ物にならないくらい良いでしょ？」

「はいっ！」

口にしてはいけないはずの言葉を口にしてしまう。彼のより士郎のモノのほうが上と。アソコを比べられ、優劣をつけられるなんて男性にとっては屈辱的なことだろう。思っても言うてはいけない。なのに思った瞬間に言葉が溢れて止まらない。

「クスリっ！ これもクスリのせいなんですね。わたしになにを飲ませたんですか」

「そんなに怖がらなくても大丈夫よ。ただちょっと素直になれるだけのおクスリだから。士郎と世界中を回ってるときに見つけた自白剤のようなものよ。飲んだ人間の意識を低下させて外からの刺激にも内からの情動にも弱くなってしまうの。つまり」

パンッと手を叩くと、凜は嬉しそうに言う。

「桜が婚約者の粗チンより士郎のおちんぼのほうが気持ちいい、もっと抱かれないと思ってるならそれがあなた

の本心というわけ。別に恥ずかしがることないわよ。好きな人とするセックスが一番イイに決まってるんだから」

「違う、わたしはそんなこと考えてません！」

とっさに否定したものの、先に士郎の剛直が身体に馴染むと口走ってしまったため、白々しい嘘にしかならない。

今さら誤魔化してもお見通しだと姉は凜然と笑う。

「あらそうなの？ でも身体は正直みたいよ？」

凜の指が桜の秘裂をなぞる。くちゅりと音がした。指には士郎の雄突起が出入りする隙間から漏れ出した愛液が、ねっとりと絡みついている。

「こんなに濡らして。ほら見てごらんなさい。桜の身体ったら、さっきからビクビク痙攣しっぱなしよ？」

「ああ、いや……言わないでください……」

指摘されなくても分かっていたことだ。肉茎が抽送を繰り返すたびに、身体の奥で甘い痺れが広がり、下腹部に重い疼きが生まれる。それはすでに無視できないレベルまで膨れ上がっていた。この疼きを解き放ってもらうこと以外なにも考えられなくなり、堕ちてしまうまで時間の問題と感じた。

己の身体だから誰よりも自分が一番分かってしまう。
(先輩の……気持ちいい……これ、わたし、抗えない……)

クスリと快楽に蕩けきった脳では正常な判断ができない。跳ね除けなければと思っても身体が言うことを聞い

てくれない。

それどころか自ら進んで士郎を求めている。

結合部から溢れる愛液はすでに白濁してしまっている。粘性の高い液体を垂れ流しながら、桜は淫らに腰をくねらせている。無意識のうちだった。気づいても止められない。身体がどうにかしてしまった。

浅ましくも貪欲な雌としての姿を、かつての想い人と姉の前に晒す。

恥ずかしくて死んでしまいそうな気分だった。けれどそれすらも背徳感を煽る材料になるだけ。身悶えするほどの羞恥が狂おしいほどの愉悦をもたらす。肉体だけでなく心まで辱められていることへの悦びで満たされていく。

「だいふ気分が乗ってきたわね。それともクスリのせいかしら。どっちでもいいわよね。いつも他人のことばかり気にかけてる桜が素直になって、自分の快楽に貪欲になれるなら」

妹の様子に満足したのか、凛はそれ以上何も言わない。その代わりと言わんばかりに士郎と唇を重ねる。まるで見せ付けるようにして互いの舌を絡ませ合う濃密なキス。

姉夫婦の情熱的な姿に当てられ桜はさらに昂ぶった。
(わたしの前であんな風に抱き合って、あんなに激しく求め合ってる……わたしも先輩としたい)

「先輩……ああ……」

無意識のうちに声を漏らしていた。夢うつつに腕を伸

ばしていた。

「もう我慢できないんでしょう？ 正直に言いなさい」

姉の問いに対し、桜は一瞬だけ逡巡する。だが結局は自白剤と下半身の摩擦で生み出される快樂とに勝てず、口を開くしかなかった。

「はい……先輩と、キスしたい……です。わたしにも、姉さんのように」

「ええ、いいわよ」

してあげてと凜が士郎の背中を押す。

上体を倒した彼の顔が近づいてくる。高校のときは童顔を気にしていた士郎だが、十年も経つと大人の顔つきに変わっていた。表情に当時の面影や甘さは残しつつ、全体の輪郭は研ぎ澄まされシャープになっている。

（先輩の目にわたしはどう映ってるのでしょうか。ちゃんと大人の女性に見えていますか。先輩から見て魅力的ですか）

二人は唇を重ねた。舌を伸ばし唾液を交換する濃厚な口付け。唇を合わせるだけでは満足できず、相手の口の中にまで舌を潜り込ませて粘膜同士を擦り合わせる。舌を絡め合い吸い付き合うたびに水音が鳴った。

桜がキスに夢中になっている間も士郎の腰は動き続けた。上から振り下ろすようにして蜜壺の奥まで抉ってくる。

「んっ、あああ♡先輩のおちんちん、またわたしのナカで大きくなってます♡」

恍惚とした表情でペニスの感触を堪能する桜。そんな

彼女に追い打ちをかけるように亀頭の先端が子宮口に食い込むほど深く突き入れられる。そのまま最奥をぐりぐりと捏ねられた。

「ぐり、ぐり……しちゃ、らめえですうううう♡♡
はっ、はっ——ああ♡ そこっ、気持ち良すぎて……いひい!? ダメなのに♡ そればっかりされたら、先輩のおちんちんの硬さ、覚えちゃう♡ こんなに硬いおちんちん知らない♡ 挿れてもらったことないんです♡」

「ふ～ん、桜は硬いおちんぽが好きなんだ」

「はいっ！ 大好きです♡ このおちんちんの子供なら、何回でも産ませて欲しいくらいに大好きです！」

「そうか。じゃあ俺がお前のことをいっぱい孕ませてやるからな。俺の子種で妊娠しろ」

「はい♡ せんばいの子供産みますっ♡ わたしは先輩の赤ちゃんを産むために生まれてきました。だから早くください、先輩の精液っ♡」

「自白剤と子宮口責めで完全にデキあがったわね。もう自分が何を言ってるかも分かってないわよ。うちの旦那様の子宮ぐりぐり責めは本当に女泣かせなんだから」

呆れたようにも感心したようにも言う凛の横で、桜と士郎の行為はスパートが掛かる。

彼はさらに強く腰を打ち付けてくる。そのたびに膣内がきゅっきゅっと収縮するのが分かった。彼の肉棒が脈動している。射精が近いのだ。桜は士郎と一緒にイキたくて、両足を彼の身体へと巻きつけた。全身を使って愛する人の体をホールドする。

「……ぐ、桜ッ、そろそろ出すぞ。いいんだな？」

「はい、きてくださーい！ わたしのおく、先輩のおちんちんミルクで満たしてくらさいい！」

「くう……出るッ!!」

次の瞬間、怒張した肉棒が激しく跳ね回り、大量の精子を吐き出し始めた。ドクンドクンと鼓動しながら熱い奔流を注ぎ込まれていく。

今まで体験したことの無いほどの圧倒的な悦楽。これが愛の力というものなのか。

「ひあ、あああ♡ あ、あついい♡ あついよおお♡
くあああ、はへえっ、お、おおうっ♡♡ んあ、はあ
～……は、入ってきますう～……」

桜は自分の中の常識が崩れ去っていく音を聞いた。

十年間溜め込んだ思いが一度の膣内射精だけで満たされるはずもない。すぐに桜のほうから二回戦を申し込み、今度は自分が上になって腰を振る。

「あ、あああっ……♡すごい、先輩のがお腹の中で暴れまわってる……また出てる……先輩のおちんちんみるく、わたしのナカにびゅーって出されてます……子宮に精液浴びせかけられながら、おちんちんでゴシゴシされるの好き♡ わたしのナカ、雑巾代わりに精液だらけのおちんちん拭われるの大好き♡ 気持ちいい、気持ちいいですう……もっと、もっと欲しい……もっと先輩のおちんちんみるく注いで……もっと……もっと……もっと……」

狂ったように騎乗位で腰を振り続ける桜。その様は雌

が雄を貪る野生の交尾だった。

大人しく控え目だった後輩の痴態を目の当たりにして、士郎も興奮を駆り立てられたらしい。先ほど出したばかりの陰茎はすぐに回復。下から突き上げるように膣奥を責め立ててくる。

ドチュンっ♡ と子宮口が潰れるほど力強く突かれると、桜は仰け反りながら天井に向かって歓喜の歌を歌う。

「んひいいいっ♡♡ しゅごいれすううっ!! おちんちん、先輩のおちんちんっ♡♡♡ こんなのはじめてれすっ♡♡♡」

普段の彼女からは想像もできない下品な声で喘ぎまくる桜。婚約者とはレベルが違う士郎のデカチンに加え自白剤を盛られた今、キメセク責めの前に正気を保てられない。全てを忘れ快楽に溺れてしまっている。

その姿はとても卑猥だった。快楽に耽溺する姿は淫乱そのもの。

軟弱な雄なら普段の彼女とのギャップの大きさに驚き、幻滅するだろう。しかし士郎はこの程度のことでは動じない。むしろ征服欲が刺激されて燃え上がるタイプのようだ。

「桜、本当にエロくなったな。それとも元からエロかったのか。真面目な娘ほど実は溜めてるって言うし」

「そ、そんなこと……ないです……わたし、こんなに乱れたこと……先輩だから、相手が先輩だからですよ？」

「まったく、そんな可愛いこと言うなんて反則だ。我慢

できなくなるじゃないか」

士郎の手が桜の腰を掴む。目標を固定した状態で下から串刺しにされた。

「あっ♡ ああんっ♡ あん♡ んんっ♡ 先輩の動き
激しいですっ♡ そんなに激しくしたら壊れちゃいます
♡」

「まだまだ。こんなじゃ全然足りないだろ？ もっと
もっと気持ちよくしてやる」

そう言うとき士郎はさらに激しく腰を遣い始める。パン
パンパンッと肉同士がぶつかり合う音が鳴り響くくらい
苛烈な抜き差しを繰り返す。カリ首が肉襷を引っ掻き回
し、亀頭が子宮口をノックするたびに意識が飛びそうに
なる。

「おほっ、ほおおおお～～～～っ♡♡♡ せんばい
のおちんちんしゅごいでしゅううううう～～～っ♡♡
♡」

「叫べ、叫べ！ もっとエロい声を出すんだ！」

「そんなっ♡ おくっ♡ 奥に当たるとおっ♡ おん
おおおおおおっ♡ せんばいいいいいいいいいっ
♡♡♡ もっと♡ もっとはげしくしてくださいいい
いっっっ♡♡♡ もっと♡ もっと犯してください♡
わたしのおまんこ、先輩の大きさに広がって戻らなくな
るまで使って♡ すごいっ♡ すごいっ♡ これすごい
ですう♡」

桜の懇願に応える形でピストン運動が激しくなる。バ
チンバチンと殴りつけるような音がする勢いの抽送は、

凄まじい威力をもって子宮口を叩き潰す。一回ごとの突き込みが深く長く鋭くなっていくにつれ快感も増していった。

さらに下から伸びてきた左手に乳房を鷲づかみにされ、先端部を指先で転がされる。高速で動く人差し指に乳首をピンピンと弾かれ、可愛がられてしまう。反対の手では割れ目の上部を探られ、コリコリに勃起したクリトリスを転がされる。

上下の敏感な粒を介して与えられる悦びに桜は悶え狂い、随喜の涙を流してよがり狂ってしまう。

「ひぎいいいいいっ！ あっ、あっ、だめ、もれ、もれ
ちやいますっ、れちやうううっ！ もれちやいますっ♡

気持ち良すぎて、先輩に跨がってお漏らししちゃいます♡♡ あぐうううううっ、らめええええ！ もう、がまん、できな……！

「だから言ってるだろ。俺の前で我慢なんかするなって」

士郎の親指にクリトリスを押し潰された。硬く勃起したミニちんぽを乱暴に刺激される。耐えていた堤防は呆気なく決壊してしまう。

「はへええええっ、がっ！ あっ……くおあおあおあおあ
あおあああああああっっ♡♡♡ だ、め、またイツぐう
うううううううううっっっ♡♡♡ でるっ、でちゃ
うっ、でるでるでるううう」

ブシャアアッと勢いよく吹き出た体液が結合部から飛び散る。

「ひっ、ひっぐううううううううう~~~~っっっ♡

♡♡ ひもひ、ひもひよしゆぎてっ、イっひやったあ
ああああ♡♡♡ んほっ、おほっ、おほおおおおっ
♡♡♡ 止まらないっ、イキっぱなしで止まらないっ
♡♡♡ あひや、あひ、あひっ…ひっぐ！ うあゝあゝあゝ
あゝ!! うあああああああああゝ！ うあああゝあああ
ああああ！」

ガクガクと痙攣しながらイキまくる桜の秘所からは尿
とは違う生暖かい液体が溢れ出す。

「うわあ～、潮噴きすごいわね。婚約者の粗チンでイキ
潮噴き散らかしてイッたことある？」

横から揶揄うように凜が言う。

「な、ないでひゅうう♡ 先輩の♡ おひんひんらす
ごすぎるんですよ♡ 先輩のおちんちんに比べたらあ
の人のモノなんて子供と同じですから♡」

「よしよし、良く言えたわね。素直な桜にはご褒美をあ
げる」

そう言う凜は桜の背後へと回り込んできた。そして
後ろから抱きしめられたかと思うと胸を弄び始めた。

「ふああああ♡ おっぱいダメえ♡ 弱いんです♡
乳首つねっちゃダメです♡」

「そうみたいね。士郎に弄られてたときから反応が良
かったわよ」

凜の指が桜の胸に食い込み、乳肉を揉みしだくように
動く。そのたびに甘い喘ぎ声が漏れた。さらに耳穴に舌
を入れられてしまう。びちゃくちゅといやらしい音を立
てながら穴の中を舐め回される。聴覚からも性的な興奮

を促されているようだ。

姉妹レズプレイに感化されたか士郎が「俺も」と身体を起こしてくる。彼は対面座位の格好で桜の背中に腕を回した。

夫婦は前後から桜を抱きしめ息びったりに動き始める。

士郎は下から突き上げるようにして肉棒を突き入れる。その衝撃に桜が仰け反る。かと思えば今度は背後の凛が両手で胸を愛撫してくる。女同士、さらに血を分けた姉妹である彼女は、桜が感じてしまうポイントが分かっているのか的確にツボを押される。姉の指先が乳輪を撫で、乳首を摘まみ、引っ張るたびにピリリとした感覚が走った。

衛宮夫妻は一言も交わすことなく、阿吽の呼吸で左右の耳を同時に甘噛みしてきた。舌先で耳の穴の中を穿ってくる。二人の舌が絡まり合う水音がダイレクトに頭の中に響いた。両方の耳を同時に犯されているため、片耳ずつ責められるよりも音の逃げ場がなく頭蓋の内側で反響する。

「れる、ちゅふ、むちゅ、べちや、むちゅう、ちゅふちゅ♡ 身体ピクピクさせちゃって、可愛い♡ うふ♡
う、んんう、れる、れるお♡♡ はあ、ちゅっ、ちゅぼん♡ はあ、はあ♡ もっと気持ち良くなっちゃいなさい♡ んむう、ちゅっ♡」

ゾクゾクするような感覚に支配され、身体が火照っていくのが分かる。脳細胞一つ一つにまで甘美な毒が侵食

していく。

下腹部を密着させたまま士郎が腰をグライントする。お腹側の膣壁にカリ首を引っ掛けたまま動かされると、子宮口が押し上げられるように圧迫された。Gスポットへの刺激と合わさることで快感は何倍にも膨れ上がる。(きもちいい……とっても気持ちいい……こんなの……もう……)

この気持ちよさには抗えない。こんな交わり方があると教えられてしまったら、婚約者との退屈なセックスには戻れなくなってしまう。それじゃダメなのに。いけないことをしてるのに。背徳的な行為に悦楽を覚えている自分がいる。

「そろそろ限界かしら。またイツちやいなさい桜」

耳で囁くような姉の声を合図に再びあの感覚が襲い掛かってきた。陰唇や淫核、肛門の括約筋といったあらゆる性感帯から電流のような衝撃が走る。

「あああ——っ、あ、いやあ、あああああ——っ、だ、だめ、あ、ああ、あ——っ、んん————————！！」

頭が真っ白になるくらいの快感。次の瞬間、全身の力が抜ける。桜の意識は深い闇の底へと沈んでいった。

完全に意識を失う直前に桜は姉と士郎が話しているのを聞いた。

「やり過ぎたんじゃないか」

「いいんじゃない？ 今まででできなかったんだから。溜まりに溜まったものを解消するにはまだまだ足りないくらいよ」

「そうかなあ……」

「そうよ。むしろ本番はこれからでしょ？ あんなのじゃ桜も物足りなかったわよきっと」

そんな会話を聞きながら桜は完全に失神したのだった。

※※※

日英で離れて暮らす妹から「今度、結婚することになりました」とメールが来たのは、絶倫な旦那様に腰が抜けるほど愛された翌日の昼だった。昨日も体力の続く限り一晩中激しくまぐわい、限界を迎えたところで泥のように眠った。時計の針が正午を差すころ、空腹を訴える腹の音でようやく起きた。

寝ぼけ眼でメッセージを確認していた凜は、妹の結婚宣言で一気に叩き起こされた。驚きの声を上げながらスマホから目を離し、この感情を共有しようと振り向く。

だが彼女以外の人間は肉欲の宴に溺れた痕跡も生々しいベッドですやすやと寝息を立てている。

大人が数人一緒に寝られる広さのベッド。その中心で寝入っているのが夫の衛宮士郎だ。彼の両脇にはセイバーことアルトリア・ペンドラゴン、ルヴィアことルヴィアゼリッタ・エーデルフェルトが寄り添う。

聖杯戦争から十年。この世界に留まったセイバーを伴い英国に渡ってきた凜と士郎はルヴィアと出会い、騒がしいラブコメ的日常の末に凜が士郎と結婚。士郎とセイ

バーの絆を知っていたため、あくまでも自分が正妻とした上で騎士王を妻公認の愛人に迎え入れた。

誤算はそこに「それなら私も」とルヴィアまでついて来たことである。

いや、この場合は誤算というより、ルヴィアの負けず嫌いではしいものはなんとしても手に入れようとする性格を凜が甘く見ていたと言うほうが適切か。

そんなわけで現在の衛宮邸は一人の男と三人の女が、一つ屋根の下に住んでいるハーレム状態。この環境で野獣にならない男など存在しない。士郎とて男である。しかも彼の男性機能は並ではない。一度スイッチが入ってしまえばそれこそ精魂尽きるまで相手を貪り尽くす獣となるのだ。

いつも三人がかりで挑む女たちのほうが先に音を上げてしまう。

「気持ちよさそうな顔して寝ちゃって。憎たらしいっらないわね」

昨日も散々にハメ潰されたことを思い出すと、悔しいやら腹立たしいやら。すっかり夫婦の序列を身体に叩き込まれてしまった。

それでもやはり愛しい男が幸せそうに眠っている姿を見ると、自然と笑みが溢れてしまう。

「んん……」

小さく身動きする士郎。そんな彼の顔を覗き込んでみると目蓋が小さく震え、ゆっくりと持ち上がった。

「おはよう、士郎」

寝起きのためぼんやりしていた旦那様だが、すぐに意識が覚醒したようだ。

「おはよう、遠坂……？」

「もうおはようって時間でもないけどね」

ほんの少し皮肉成分を込めて言ってみる。

毎晩一人の男を三人で取り合ってはセックス疲れて昼まで寝ている。不健全極まりない生活に苦笑が漏れた。

「それよりこれ見てちょうだい」

凜がスマホを鼻先に突きつけると、士郎は桜からのメールを黙読し始めた。

「桜が結婚!? 相手は？」

「知らないわよ。あの子ったらなにも言わないんだもの」

「そっか……」

凜の言葉に士郎は小さく呟いた。その表情には寂しさと喜びが入り混じっている。彼は複雑な心境のようだ。

中学から高校にかけて桜は毎日のように衛宮邸を訪ね、士郎と過ごした。幼少期に養子へ出され複雑な家庭環境で育った彼女が、お人好しな士郎の気に当てられ家族や人の温かみを知るうちに彼に惚れてしまうのは当然の流れだったかもしれない。

その一方で凜も聖杯を巡る戦いの最中に士郎と急接近。そばで彼の理想や危なっかしい生き方を見ていると放っておけなくなった。結果として姉妹で同じ男を好きになり、最後は士郎が凜を選んだ。

桜にとって衛宮家で過ごした日々はかけがえのない思い出になっているだろう。その彼女と士郎を離してし

まった。

後悔はしていない。今が幸せだと断言できる。しかし、あの頃を思い出すとほんの少しだけ寂しい気持ちになってしまうのも事実。

そう思って読むと文面の端々から士郎への未練が感じられる気がした。これは自分の先入観か。それとも感じてないつものの罪悪感か。

凜は日本へ行こうと提案した。純粹に妹の顔を見て祝福したい気持ちが第一。だが、もし桜の表情に僅かばかりでも影が差していたら、士郎への消えない気持ちが残っているようなら話は違う。

士郎には事前に言い含めておいた。

「もし桜がアンタのことをまだ想っていたなら、あの子を連れて来ましょう」

それはつまり、士郎のハーレムに桜も加え入れるということだ。妹を愛人三号にしてしまう。当初この案を士郎は躊躇った。せっかく日本で幸せになろうとしているのに、今さら自分たちが出て行って波風を立ててどうする、と。

だが結局は凜が説き伏せた。あくまで日本に行くのは祝福が目的で、それ以上のことは桜の様子を見てから決めればいい、本当に桜が幸せそうなら私だって騒ぎを起こそうとは思わない。そう言って日本へ連れ出すことに成功した。

答えは顔を合わせた瞬間に出た。十年ぶりに士郎と顔を合わせた桜は、あの頃と変わらない憧れや恋慕の情を

垣間見せた。

彼女の中で炎は消えていなかったのだ。たとえ外からは見えなくとも、青く、静かに、熱く燃え続けていたそれが、懐かしい面々と再会して火勢を強くした。凜だけでなく鈍感朴念仁の士郎でも気づくほどに。

特に桜の感情が漏れ出したのはルヴィアを見たときだった。

もともと顔見知りで士郎の女と認識していた凜やアルトリアのことは桜の中で折り合いがついていたのだろう。だが自分の知らないところで士郎と出会い、今ではすっかり彼の女気分を出してる | 第三の女《ルヴィア》を見て、そこは本当なら自分の席だったのにと感じたのかもしれない。

それを口に出さない程度の分別はあったが、我慢しきれずに小さな嫉妬心を表す。

ルヴィアは桜が向けてくる嫉妬を気にしてない様子だった。むしろ同じ男を愛する女として連帯感を感じてさえた。

計画は順調に進んだ。久し振りに衛宮邸の台所に士郎と並んで立つ桜は浮かれていた。中座した隙に飲み物へクスリを混ぜられても気づかない。

少しすると桜は船を漕ぎ出す。クスリが効き始め意識が朦朧としているのだ。ふらふらと上体が大きく揺れる。

寝室に運び、服を脱がせ、士郎と二人きりにするまで完璧に進行した。

あとは土郎の絶倫つよつよおちんぼの出番だった。一晩がかりでしっかり婚約者との違いを刷り込んだ。白白剤で嘘がつけない桜は何度も「先輩のほうがすごい！先輩のおちんちんの方が気持ちいい！」と絶叫させられた。

最後の方はクスリの効き目が薄れてきたのか、泣きじゃくりながら「ごめんなさい……浮気しちゃってごめんなさい……」などとうわ言のように婚約者への謝罪を繰り返していたが、それもまたスパイスとなって興奮した土郎は大量の精子を注ぎ込んだ。

「わたしたちはしばらく日本に滞在するから。その間に決心がついたら言いに来なさい。そのときはみんなで歓迎してあげる」

凜の言葉に桜は虚ろな目を向けるだけで返事らしい反応はなかった。

灯りを落とした寝室に肉同士のぶつかる小気味よい音が響く。

「んあっ……いいです、それ……んっ、あっ、んううっ……」

「んっ、ああっ、はあっ……どうっ、気持ちいい……？」

「はい、とっても……」

ベッドの上では間桐桜が婚約者の男に抱かれている最中だった。男はピストンのペースを上げ、愛液でぐちょ濡れになった膣内を激しく掻き回していく。

「ひゃうん、んはあっ、あ、あああ、これえ……んんうううっ……」

「くはっ、桜、俺も、イキそうだ……」

射精に向けて一段と早くなる腰使い。それに合わせて膣壁を締めあげると男のものがさらに大きくなるのを感じた。この女も俺で感じている。女体の反応に気を良くした婚約者はそう判断したに違いない。

だから彼は「俺も」と言った。

だが実際はどうだろう。

「ほら、さくら、もう我慢しないで、イッていいんだぞ」

「あっ、あううっ……ま、待ってください……そんな、いきなり激しくしたら私……あんっ、ふああっ……」

口では婚約者で感じているふりを装うが、内心では物足りないと感じていた。

（このおちんちんでは足りない、先輩の硬いおちんちん、膣奥まで届いてぐりぐりされたら簡単にイカされてしまうおちんちんじゃないと、わたし……）

そんな女の内心を知ってか知らずか男はフィニッシュに向かって腰を叩きつけ続ける。激しい動きにベッドのスプリングが悲鳴を上げる。

「ああああッ……！　すごっ、これすごいです……！」

婚約者のヒートアップ具合に合わせて演技してあげる。ちゃんと下半身の筋肉を使って膣内も締め、うねらせてあげた。

桜の婚約者はいい人だが奥手で女性経験は少ない。セックス知識の大半が成人向け漫画に偏っている。そのため、こんな反応をするのは女が本気で感じているときと信じ切っている。

婚約者が冷め切った心で膣道を締めたり緩めたりしているとは、露ほども疑わない。

「いいよ、桜、このまま中で、いいな？」

「……はい、どうぞ、全部ください」

中に出されるのは初めてではない。もう結婚するのだからと最近は生でしたがる。桜も子供がデキれば士郎のことを忘れるきっかけになるかと思い引き受けてきたが、いまは先輩と比べて半分も出せない射精力でも子供が作れるんだとついつい比べてしまう。

「ああ、イク、イクぞ、うう、出る！」

快感に任せて子種を放つ男。一人だけ盛り上がって勝手に射精する。身勝手な吐精。

(先輩のセックスはこうじゃなかった。ちゃんと女の人のことも気持ち良くして、一緒にイこうとしてくれました)

衛宮邸での許されざる不貞行為から一週間。姉の誘いに乗って士郎とイギリスに行くか、それとも日本に残って婚約者と順当に結婚するか、いまだに桜は決めかねていた。

婚約者に大きな不満はない。優しく思いやりがあり責任感がある立派な人だ。ただ、男としての魅力があるかというと……。

この人と絶対、一生一緒にいたい、この人とならなながあっても耐えていけると感じるほどの愛情は抱いてなかった。だけど結婚なんてそんなものかもしれない。プロポーズされてから結婚に関して桜なりに調べた中で、夫婦性活を長続きさせる秘訣は一時の激しい恋愛感情より、一緒にいて苦にならないことや楽だと感じることだと書いてる文献がいくつかあった。

それで言うなら、この人はまさにそれに当てはまった。桜にとって彼は恋愛対象ではなく、一緒にいることが苦にならず気疲れしない相手だったのだ。だからプロポーズも受けた。

しかし、いざ士郎と再会したら、そんな小賢しい理屈で結婚することに疑問を持ってしまった。

自分を連れて帰るため迎えに来たという最愛の人を前にして、桜の心に迷いが生じた。本当に自分はこの人と一生暮らしていくのだろうか。先輩と一緒に行かなくて

今度こそ人生に後悔ばかり残さないだろうか。

考えても悩みが深まるばかりで決められない桜は身体に聞いてみることにした。改めて婚約者とセックスしてみ、これから先ずっと彼のモノでいいのか確かめてみることにしたのだ。結果、全然ダメだった。士郎のモノとは雲泥の差。やはり先輩は凄いと再確認しただけだった。

「ううっ、くっ……ううっ、ううっ……桜の膣内、気持ちいいっ……くっ、んううっ……！ ああっ、ふっ、ううっ……！」

婚約者が射精に向けて一心不乱に腰を振れば振るほど桜の気持ちは冷たくなっていった。感じているふりのパリエーションも尽きてきたし、そろそろ終わらせようとタイミングを計る。そして彼が達しそうになった瞬間を狙って膣を思いきり締めつけた。

「ぐうっ!? あ、ああっ、だめ、だめだ、そんなに強くしたらすぐ出るっ！ ダメだって！」

予想通どおり男が情けない声で訴える。その切羽詰まった様子にも心が動かない。桜は無感動に膣を操作した。

そして――。

「あっ、あぐっ、ああ、ああああああ～ツツ！」

情けなく喘ぐ男を冷めた目で見ながら、子宮口に押しつけられた鈴口から勢いよく放たれた精液を受け止める。熱い奔流を受け止めながら、もうこの人のために無駄な演技をする必要はないんだと感じた。

一週間ぶりに訪れる衛宮邸は静かだった。まだ午前中とは言え、とくに太陽は高く上がっている。早朝よりも正午に近い時間である。まだ寝てるということはないと思うのだが。

桜は持ってきた合鍵を取り出す。かつて士郎に渡された合鍵。彼らがイギリスに渡り、世界中を旅する生活になってからは、この鍵で衛宮邸に入り掃除をしてきた。思い出いっぱいの家を保つことが彼らとの絆だった。

鍵を開けて中に入ると人の気配がないことに気づく。もしかして留守なのだろうか？ そんなことはないはずだ。だって玄関には靴がある。まだ寝ているのだろうか。「先輩？ 姉さん？」

ずいぶん寝坊しているものだと訝りながら上がる。廊下を奥へ進むと、ある部屋から人の声が漏れていることに気づいた。

そこは士郎の部屋だ。

なにか胸騒ぎを感じた桜は足音を殺して部屋に近づく。扉の前で止まり、聞き耳を立てる。すると中から女のあられもない声が聞こえてきた。

「シェロ♡ シェロ♡ 今日も素敵ですわ。こんなに遅く硬くなって……」

聞こえてくるのは間違いなくルヴィアの声だ。一週間前は姉妹の話し合いだから凛に任せると言ってあまり前に出てこなかったが、同性の目から見ても並外れた美女

だった。見事な金髪を縦ロールにし、青いドレスに身を包む様は物語のお姫様のよう。

聞けば本当に実家はフィンランドの名家らしい。

士郎の傍には凜とセイバーだけでなく、こんな女性も侍っているのかと驚かされた。

そんなルヴィアが今は艶めかしい声を上げている。

「……あぁっ……そこっ……もっと……んっ、んっ……あぁっ……！」

それは明らかに嬌声だった。彼女の声が鼓膜を震わせるたびに心臓が早鐘を打つように鼓動する。薄く開いた扉の隙間からそっと室内の様子を窺うと信じられない光景が目に入った。裸になった二人の男女が激しく絡み合っている。

士郎がルヴィアを背後から抱きしめ、背面側位で犯していた。右足を大きく開かせ、結合部を丸見えにした二人は、お互いの性器を貪るように激しく交わっている。

士郎は左手でルヴィアの胸を揉みながら右手でクリトリスを弄っていた。膣のみならず敏感な陰核まで同時に刺激され、ルヴィアはあられもなく喘いでいるようだ。お嬢様然とした美貌がよだれを垂らしながら淫らに悶える。

それがどれほど気持ちいいか分かる。分かっている。桜も一週間前に身をもって体験したから。

「あぁっ、いいっ、いいですわっ、あっ、あっ、あぁぁっ……♡」

「くぅっ、いいぞ、ルヴィア……」

お互いを感じ入っている二人を見て胸が苦しくなる。今すぐ乗り込んでいくことも逃げ出すこともできず、桜は物陰に隠れたままフリーズする。金縛りにあったみたいに一歩も動けないでいた。

それでいて身体が火照り始め、あそこが濡れてくるのを感じた。

(先輩……)

愛する男の逞しいペニスで貫かれて恍惚としている他の女を見て、自分もあんな風になりたいと願ってしまう。

「くはっ……はあっ、ああ……んああっ、あんっ」

「ここの浅いところを擦られるのが好きだよな。どうだ？」

「そ、そうですわ。そこをカリで引っ搔かれるのがたまりませんの」

自分の知らないところで何度も身体を重ねてきたのだろう。士郎はルヴィアの弱点を知り尽くしているようだった。膣内の弱い部分を的確に責められて快感に打ち震えるルヴィアは美しかった。同じ女性でありながら見惚れてしまうほどに。そんな彼女の表情を見ているだけで身体の芯から熱くなり、下腹部の奥が疼き出す。

(せんばい……私も……)

早くあの場所に連れて行ってほしい。熱く滾った肉棒で奥まで貫いてほしい。

「イキますわ。もっ、もう――」

「俺も限界だ。このまま中に出すぞ」

ピストン運動を早める士郎。ラストスパートに入ったことを悟り、ルヴィアは期待を込めて腰をくねらせた。肉褌が剛直を締めつける。それを振り払いながら男根が抽送される。膣壁を擦り上げ子宮口を突き上げる。「ああっ、イクッ、イクッ、イクッ、イッてしまいますわあっ！」

全身を痙攣させながらルヴィアは絶頂を迎えた。膣ヒダが一斉に収縮して士郎のモノを強く締め上げる。その甘美な感覚に耐え切れず士郎もまた射精した。

どくん、どくんっ、びゅくっ——！

大量の精液が注がれていく。二人は身を擦り合わせ、震わせ、お互いの熱を感じ取りながらしばらくジッとしていた。

ルヴィアから離れた士郎に今度はセイバーが近寄る。仰向けで寝る彼の腰に逆向きで跨がると背面騎乗位で自ら挿入した。

士郎の剛直は一発射精した程度では欠片も萎えない。華奢な彼女は膣洞も狭いのだろう。みちみちと肉や骨格が悲鳴を上げながら、それでも懸命に腰を上下させ奉仕する。

「シロウ……愛しています……」

頬を赤く染めたセイバーは潤んだ瞳で想いを告げた。

「ああ、俺もだよ」

答える士郎の顔にも笑みが浮かぶ。彼もまた心から彼女を想っていることが伝わってくる。

二人の間に流れる甘い空気に対して下半身はケダモノ

の動きを繰り返す。背面騎乗位で挿入したセイバーは、
とろとろの膣穴で肉棒を咥え込むと上下の運動だけではなく、
根本まで呑み込んだまま尻を回したり、前後に揺
すぶってみたりする。

まるで獣のような激しい腰使いで彼を求めている。

愛液にまみれた蜜壺からは白濁液が溢れ出し、いやら
しい水音を立てている。

「シロウ♡ シロウ♡ 好きです♡ 愛してます♡」

狂ったように愛の言葉を繰り返しながら、セイバーは
愛しい人の上で踊る。膣内を挟られるたび意識が飛び
そうになるほどの快感が走っているのだろう。時折「ひ
ぐっ♡ ひぐう♡」と息が詰まった声も出す。

その感覚に桜も覚えがあった。大きすぎるおちんちん
が入ってきて肉筒だけでなく喉まで反射的に締まる。す
るとピストンの最中に呼吸が苦しくなってしまうのだ。
「ふああっ！ ああんっ！ 気持ちイイですっ！ シロ
ウのペニスが凄くて、もう——っ！」

後ろから突かれながらセイバーは士郎を肩越しに見つ
める。情欲に溺れた雌の顔。もはや理性など残っていな
い。あるのは本能だけ。目の前にいる雄の子種汁を注い
でもらいたいという欲求一点のみ。

セイバーが身体を前に倒し、前傾姿勢で蒲団に手をつ
く。まるで誰かに謝罪してるかのような体勢で腰振りを
加速させる。その動きに合わせて士郎も下からピストン
する。

騎士王の細い腰を掴みGスポットやボルチオ目がけ、

何度も亀頭を突き上げた。

「あひっ!? あひいいっ!」

ピストンされて軽く達してしまったのか、セイバーの表情が白目をむく寸前まで崩れる。

「ああああ〜っ♡♡♡」

普段の凛々しい姿とは似ても似つかない淫蕩ぶりである。

彼女の尻を両手で鷲掴みにすると、士郎は性玩具でも使うように乱暴に上下させた。

ズチュッ、ブチュッ、グチュンッ——!

「おほおおっ♡ おおおおっ♡ イクッ♡ イグウウウッ♡ イックうううううッ!」

背筋を反らせ、天を仰ぎ見ながらエクスタシーを迎えたセイバーは、ビクビクと全身を震わせた。その震えに合わせるように膣穴が窄まり、子種を搾り取ろうとするかのように締めつけている。

その強烈な刺激に耐えることができず士郎は吐精した。

「んおおお♡♡♡ おほおおお♡♡♡ 熱い♡♡♡ 熱いい♡♡♡」

子宮口に浴びせかけられた灼熱の粘液によって再度アクメを迎えるセイバー。背中を仰け反らせたまま硬直し、舌を突き出しながら悶絶する。

やがて力を失ったセイバーは、ふらりと士郎の胸の上に倒れ込んだ。

あらかじめ予期していた士郎は状態を起こし、細身の

美女を抱き留めると優しく蒲団の上に降ろしてやる。

「やっぱり身体の相性はセイバーが一番なのかしら。お互い気持ちよさそうにしちゃって」

やや尖った声音で凜が言う。ほんの少しの嫉妬心が感じられた。やはり愛人を持つことは認めていても、自分より夫とセックスの相性がいい女が他にいるのは癪なのだろうか。

「いくらセイバーとの行為が気持ち良くて正妻は私。そこは間違えないでね」

「分かってるよ」

愛妻の可愛らしいヤキモチに士郎が苦笑する。

そんな二人のやり取りに桜は胸を痛めた。

そこにあったのは絆だった。長い時間を連れ添い、育んできた夫婦の絆。自分には持ち得なかったもの。

あんなふうになりたいと思った。愛する人と結ばれて幸せになるのは、なんて素晴らしいことだ。私もこの輪に加わりたい。先輩とあんな風に見つめ合ったり、通じ合ってる空気を出したりしたい。

「いつもの頼むわね」

凜が言う『いつもの』は種付けプレスだった。

両脚を大きく開き、物欲しげにヒクつく淫唇を自らくばあする凜に覆い被さると、士郎は真下に叩きつけるような角度で挿入する。

「ああああ！ ひぎっん！ あえぐっ！ あぐっ！ あががっ！ んおおおおおっ!？」

衝撃のあまり濁った声で叫ぶ凜だが、その表情には悦

びの色しかない。待ち望んでいた展開に蕩けていた。長大な肉の槍で貫かれた瞬間、彼女の股間から潮が噴き上がる。挿入されただけでイッたのだ。しかしそれで終わりではない。

休む間もなく連続突きが始まる。

「あ、ああっ……んぎっ♡ ひっ……うっぐ……う、うぎい……おっ…おっ……ひっ♡ ああ……っ……あ、あぐぐっ……んおっ♡」

小気味よいリズムに乗って腰が打ちつけられる。太い男根が抜き差しされると一緒に白く濁った本気汁も掻き出された。身体を二つ折りにしてピストンされているため息苦しい喘ぎだが、顔に苦痛の色は微塵もなく快感しか浮かべていない。

「はひい♡ うっう　っ……いっイ、イク……イ、ぐうっ♡ イッグう　うっ♡」

種付けプレスという名称を知らない桜でも、二人の体位が10対0で男性側優位なものであることは分かる。女性側は身動きできない体勢で蒲団に押しつけられ、自分の意思ではなにもできないまま男のピストンを受けるしかない。まさに女体を貪るための体位だった。

それが分かっているが姉は率先して種付けプレスを選んだ。桜は知っている。優雅な佇まいと余裕の笑みの裏に遠坂凜が激しい負けん気を隠していることを。誰かの風下に立つことは良しとしない人物なのだ。

なのに今の凜といったらなんだ。男に組み伏せられ、抑え込まれ、己の無力を刻まれる体位で犯されながら恍

惚の表情を浮かべている。

負けることが嬉しいのだ。幸せでたまらないのだ。愛する男が相手なら。

「おっ♡ おっ♡ おおっ♡ んおっ♡ ふっ、ふーっ♡
ふーっ♡ ふはああ♡ おっおっ♡ おおおお♡
おほっ♡ ひぎっ♡ あぎい♡ しゅごっ♡♡」

姉の無様な喘ぎ声を聞きながら、桜は己の秘裂に指を這わせていた。すでにぐっしりと濡れた下着の上から割れ目をなぞる。それだけでカクンッと膝から力が抜けた。

指が止まらない。ショーツの中に手を入れて直接触れる。指を二本使って膣穴を掻き回す。

「はあ、はあっ、せんばあい……」

姉夫婦のセックスを見ながら物陰で自慰。本当に無様でみじめなのは誰だ。わたしじゃないか。ごめんなさい、ごめんなさいと心の中で謝りつつ、姉が犯されている姿をおかずに桜の手は加速していく。

「あっ♡ ああんっ♡ せんばい……せんばい……せんばい……せんばい……せんばい……せんばい……」

うわごとのように繰り返す桜の声は切なげで甘い響きに満ちていた。指の動きも激しくなる。

指を激しく出し入れすると淫らな水音が廊下に響く。己の股ぐらが奏でる淫水音に興奮して息遣いが荒くなっていった。クリトリスを親指の腹で押し潰す。快感が脳髓を焼く。

「あひっ♡ ひっ♡ いいっ♡」

だらしなく開いた口からよだれを垂らしながら喘ぐ。
もう我慢できない。今すぐイキたい。

桜と足並みを揃えるように部屋の中では凜も限界を訴えていた。

「はっ、あっ♡ いぐ、いぐ……あっ♡ おまんこ、いっ
ちゃうっ♡ いっぐう♡ あっ、あ——ツ！」

ビクンツと大きく身体を震わせたかと思うと、次の瞬間には全身を弛緩させて布団の上に倒れ込む。完全に脱力して人形のような有様。

無力化した妻の膣内に士郎は精を注ぎ込んだ。

「——あっ♡ あっ♡ あうんっ♡ くふっ♡ あ〜っ
♡ んっ♡ ひっ♡ おっ♡ ほおっ♡」

姉の痴態を覗き見ながら桜も自慰で絶頂を迎えた。愛液まみれになった手でスカートの裾を握りしめる。内腿を擦り合わせるようにして小刻みに痙攣した。

「……桜、いるんだろ」

余韻に浸っていると部屋の中から声がした。

「せんばい……」

あれだけ派手に喘ぎながら自慰に熱中していたのだ。
気づかれても不思議ではなかった。

「こっちに入って来るんだ」

士郎の声に従い、おずおずと部屋に入る。彼は蒲団の上で胡座をかいていた。その横には裸の凜がいる。乱れた髪を手ぐしで梳いてもらいながら心地よさそうに目を閉じていた。

「自分から来たっていうことは決心がついたんだろ」

「はい」

桜はうなずいた。これから自分がしようとしていることの意味を理解していた。それでもなお実行すると決めたのだ。

決して褒められたものではないだろう。人として間違っているかもしれない。倫理にも反している。しかしそんなことは関係ない。だって自分はこうすると決めてしまったのだから。

「私は先輩が好きです」

「うん」

「だから、わたしをもらってください」

「わかった。全部もらうよ。桜の人生全部」

「先輩……うれしいです……」

感激した桜は自らスカートの中に手を入れる。ショーツを脱ぐと自分から士郎の肉棒に跨がろうとした。

「駄目よ桜」

だがその直前で凜が止める。

「あなた、そんなもの付けたまま士郎の愛人になるつもりなの」

凜が指摘したのは桜の左手で輝く指輪だった。本当に士郎のものになるなら全部捨てて退路を断てと彼女は言う。

「そう、ですね」

桜はなんの躊躇いもなく指輪を外すと、ナカ出し精液が溢れてる凜の押し込んだ。

「ちょっ♡ さくらあ♡」

イッたばかりで敏感な粘膜に異物を詰められ喘ぐ凛。口うるさい姉の上下の口を同時に封じて桜は中断していた行為を再開する。

腰を落とすと、くちりと音がして対面座位で彼のモノが入って来る。

うねる膣肉を搔き分けて入ってくるペニスの存在感に、桜は息を詰まらせつつ、ゆっくり腰を下ろしていった。

「んんっ！ ふっ、ふううう！」

婚約者だった男とは比べるべくもない巨大な塊を身体の内側に感じる。熱く脈打つ剛直が子宮口まで達していた。

「はっ、はあ、はあ……入り、ました……先輩の、おちんちん……んんっ♡ やっぱり、すごい……大きすぎます……♡」

お腹を撫でさすりながらうっとり眩く。この圧迫感こそが愛する人のものである証だ。他の男にはない圧倒的な熱量がある。この熱さを子宮口で感じられるだけでも幸せだった。

「動いてもいいですか？」

「ああ」

許可を得たので腰を持ち上げていく。ずるりという感触とともに亀頭が抜ける寸前まで持ち上げると一気に腰を落とした。ズチュンツと音を立てて根元近くまで埋まる。それを何度も繰り返した。

「ああっ♡ あぐっ♡ あひいっ♡」

最初はゆっくりと、徐々に速度を上げていく。我慢や遠慮などできない。この逞しい肉棒を根本から先端まで味わい尽くし、蜜壺を掻き回されたい。私は先輩のおちんちんに敗北したいのだ。そんな想いを込めて腰を振り続ける。

「あんっ♡ あうっ♡ あくっ♡ おっ♡ おあっ♡」

結合部から溢れた飛沫がシートの上に染みを作った。ずちゅずちゅと粘っこい水音がするたびに意識が飛びそうになる。それは甘美な忘我の境地。もっと欲しい。もっともっと気持ちよくなりたい。そんな欲望に支配されてひたすら腰を振り続けた。

「せんばい……せんばい……！」

「士郎って呼んでみてくれないか。もう桜は俺の愛人^{おんな}なんだろ」

「しろ、う……さん」

名前を口にした瞬間、なにかが変わった気がした。

今までとは違う新しい世界が始まったような、不思議な感覚があった。

ここから私の人生が始まるのだと桜は確信した。

「しろうさん♡ しろうさん♡ 好き♡ 大好きです♡♡♡」

狂ったように叫びながら腰を持ち上げ、落とす。引き抜くときにはカリ首に膣ヒダを刮け落とされる気持ちよさが、挿れるときには陰路を押し広げられ子宮を持ち上げられる気持ちよさがある。

「こし、うごかしゅときもち、いいっ！ ひやうッ！

はア！ ん、んう……お、おちんちん……気持ち良すぎますう♡」

桜は夢中になって腰を振り、亀頭をぐいぐい膣壁に押しつける。婚約者のペニスではどんなに頑張っても届かなかった場所まで土郎の肉棒は易々と入り込んでくる。それが嬉しくなって奥へ、奥へと誘い込む。

「んぎっ！ ぎもちい！ ぎぼちい！ おまんごぎぼちい！」

もはや自分がなにを言っているのかも分からない。ただ快感だけを追い求めて一心不乱に身体をくねらせるだけだ。

「ここだろ？ 桜の気持ちいいところは。ここされるのが好きなんだよな」

「ひにやああああ！ あああああ!! しょこっ、そこおとおお!!」

最奥部近くの粒々をぐり、ごりゅっと亀頭でわからせられると、脳髓が快楽に浸って理性が後退する。土郎のサイズを持ってして初めて自覚した性感帯。そこ目がけて桜は自分で腰の位置を調節し、何度もそこばかり刺激する。これまで過ごした無駄な時間を取り戻すかのよう

に。

「桜はそこが好きなんだな」

そう言うと今度は土郎が下から突き上げてくる。どちゅんっ、ぶちゅんっと言を立てながら杭打ちピストンが開始される。

「ここ、気持ちいいから……ここで、たくさん、したい

んです……先輩のおちんちんじゃないと届かないところ、あのひととの違いが明確に分かるところで……」

「そっか、じゃあいっぱいしよう」

士郎は腰の動きを変え、桜が誘い込んだポイントばかり小刻みに擦り上げる。

「はいっ……します……先輩とセックス、します……あっ♡ ああんっ♡ そ、そうです……せんばいの、おっきいのでえ……わたしのおまんこ、ぐちゃぐちゃにしてください……あっ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡」

ペニスが突き入れられるたびに、下半身が重怠くなっていく。快楽物質が子宮を中心に溜まり下半身が痺れた。膣奥から分泌された愛液は膣内に到底収まりきらず、大量の淫水が士郎の身体や蒲団を汚す。

膣内の締め付けもよりいっそう強まっていく。桜の身体は男を欲していた。

「んんっ……んんっんんっ……あんっ♡ 士郎さん、気持ちいい♡ 気持ちいいです……あっ♡ あんっ♡」

「桜すごくエッチな腰の動き方してるよ。本当にこれが好きなんだな」

「はい♡ 好きです♡ わたし、えっちなんです♡ 士郎さんにしてもらうのが一番好きで、一番感じちゃうんです♡ もうわたし、すっかり士郎さんの女になっちゃいました……だから、責任取ってくださいね♡」

「もちろんだよ」

「嬉しい♡ わたし今すっごく幸せです……」

士郎が腰を突き上げると桜の身体が浮き上がる。刹那

の無重力状態から復帰し、ぺたんと彼の腰に座ると肉槍の切っ先が最奥のスイートスポットを押し潰す。何度も何度もそれを繰り返されると桜は自分の身体が制御できなくなっていく。

「ふあ……あ、んうっ♡ だ、だめえ……わ、わたしもう……うっ、くっ♡ あああっ！ もっ、イっちゃ……うっ♡」

「くっ、俺もそろそろ限界だ。桜、中に出すぞ！」

「はいっ♡ きてください♡ いま出されたらわたし……ひやあんっ♡ きちやうっ♡ すごいのがきちやいますうう♡♡」

士郎も切羽詰まった声を上げ、激しく腰を叩きつけてくる。しゃにむに絶頂間近のうねり狂う肉筒を犯しながら、彼も限界に追い詰められているようだ。

「んあああああっ♡ はげしすぎますっ♡ おちんちんすごすぎるんですっ♡ わたしもうダメですっ♡ イキまくっちゃいそうですっ♡」

「いいぞ！ 俺もそろそろ出そうだ！」

「出してええええっ♡ 中にいっぱいだしててください♡ しろうさんのせいえきください♡ わたしもいきましゅうううっ♡」

子宮口へ亀頭が押しつけられた瞬間——ドビュウッ！ っと熱い精液が大量に放たれた。大量のおたまじゃくしが肉壺の中でびゅくびゅくと打ち出される。

「ああああ〜〜〜〜っ♡♡ すごいい♡ こんなにたくさん出されてるう♡」

膣内射精される快感に身を震わせ、桜は甘ったるい吐息を漏らす。ふるふると身体を震わせ、熱いオス汁に胎が満たされるのを感じた。

「はあ……はあ……♡ すごい、いっぱい出てます♡」

うっとりとはく。その表情は蕩けきっており、土郎のモノを挿入されたままの秘所からは白濁液がどろりと溢れていた。

「それにまだ、硬いですね♡」

土郎の肉棒は未だに硬度を保っていた。それを膣内で感じ取った桜は再び腰を動かし始める。

「あっ♡ ああっ♡ すごい♡ おっきくてかたいです♡ 姉さんたちにも射精したのに♡ どれだけ優秀な男の人なんですか？ 土郎さん♡ もっとしまししょう♡ わたしはまだまだいけますから♡」

「ああ、続きをやろう。桜が満足するまで何度だって」

「はい♡ ああんっ♡ 嬉しいです♡」

対面座位でお互いの身体を抱き寄せ、桜と土郎は腰を振りたくる。

「しろうさあああんっ♡ おちんちんがあああ♡ ぎもちいい♡」

二人は下半身を密着させたまま、日が暮れるまで繋がりを続けた。



桜散って、また咲いて

著者名	猪熊夜離
発行日	2023 年 1 月 2 日
Twitter	@inokuma_yoga
pixiv	3970381

